

# 箱根の巻

箱根町観光振興課

ホームページ <http://www.town.hakone.kanagawa.jp>

〒250-0398 神奈川県足柄下郡箱根町湯本256

TEL0460-5-7410 FAX0460-5-6815

箱根町観光協会

ホームページ <http://www.hakone.or.jp>

〒250-0311 神奈川県足柄下郡箱根町湯本698

TEL0460-5-5700 FAX0460-5-6517

## 日本最初の有料道路は箱根

日本最初の有料道路、それは箱根山の入口板橋村（現小田原市）から湯本村山崎（現箱根町）までの4.1キロメートルなのです。

明治6年（1873）箱根の温泉に湯治に来た福沢諭吉（慶応大学創立者）は、道も乗物も江戸時代と変らぬ不便さに腹を立て、「箱根山に人力車を通し、鉄道を造るぐらいの企てを立てよ」と、ハッパをかけました。

これに応えたのが、二宮尊徳の高弟福住正兄（まさえ）（福住旅館主）でした。正兄は小田原の有志たちと図り、明治8年4月、急坂のため人力車が通れない板橋のお塔坂と、湯本の駒爪橋の難所を付け替え、東海道の一部を拡幅する計画を立てました。この道路こそ、工事費を通行料で賄うことを、内務卿（大臣）が許可した日本最初の有料道路でした。

工事は同年9月24日完了し、翌日から満5年間、人力車と荷車から通行料を取りました。この道の開通で、やがて横浜から外人客を乗せた馬車まで入ってくるようになりました。



小田原お塔坂付近。電車もこの道を走った。

## 百年間眠り続けた馬車鉄道の定期券

明治21年(1888)10月、箱根登山鉄道の前身・小田原馬車鉄道が開業しました。

今のJR国府津駅を起点に、終点は箱根湯本の今の河鹿荘の所で、全長は12.9キロメートル、ほぼ国道上に敷いたレールの上を、二頭立の馬車が約1時間20分で走りました。東京馬車鉄道に遅れること僅か6年、日本で三番目に早い馬車鉄道でした。

この鉄道の事実上のオーナーは、先きに日本で最初の有料道路を建設した福住正兄でした。正兄はこの鉄道の開通を喜び「実に夢の如し」と懐古しています。

正兄は明治25年5月、69歳で亡くなりました。平成4年、没後百年の記念展を開くため、報徳博物館で遺品を整理したところ、紙入れの中から馬車鉄道の定期券が見つかりました。遺族の目にもとまらず、100年間眠り続けた定期券でした。没後まだ3日間の有効期間を残していました。これが今に残る小田原馬車鉄道唯一の定期券です。



## 利休切腹の謎秘めた山上宗二の供養塔

湯本の早雲寺に茶の湯の名人山上宗二（やまのうえのそうじ）の供養塔が建っていることは、案外知られていません。宗二は大阪の堺の町に生れ、千利休に草庵のわび茶を学び、師をしのぐとまでいわれました。しかし、生来口ぐせが悪く、秀吉の怒りを買いました。

畿内を追放された宗二は、小田原北条氏を頼り、小田原城下に茶の湯を広めました。天正18年、秀吉が小田原を攻めた時、茶の湯の弟子皆川広照に従って城を脱出し、秀吉が本営にした早雲寺に逃げ込みました。ここでまた、秀吉の耳にさわることを言ったため、利休の目の前で、耳をそぎ、鼻をそぐむごい仕打ちで殺されました。46歳でした。

この事件によって、利休が秀吉を見限ったことは、このすぐあと、京都の石清水八幡宮の僧侶に宛てた手紙で明らかです。

宗二の無念さを思いやり、昭和55年、縁の深い早雲寺に供養塔が建てられ、毎年4月11日の命日に茶会が開かれています。



## 連歌師宗祇の供養塔と句碑

湯本の早雲寺の中門をくぐると、往時の旅姿をしのばせる形の句碑が目に入ります。碑には連歌師宗祇（れんがしそうぎ）の代表句

「世にふるも

さらに時雨（しぐれ）の宿りかな」

が刻まれています。

連歌というのは、何人かが集って、和歌の上の句・下の句を詠みつぎ、百句＝百韻（ひゃくいん）で完成する詩です。最初の句を発句（ほく）といい、発句が独立したのが今の俳句です。

室町時代の末期に最も盛んになり、その頂点に立ったのが宗祇でした。俳聖松尾芭蕉が大変敬慕したことでも有名です。

宗祇は生涯を旅に明け暮れ、今から凡そ500年前の文亀2年（1502）旅の途中、箱根湯本の旅宿で亡くなりました。82歳でした。

その美しい死は、一番弟子宗長（そうちょう）の『宗祇終焉記（しゅうえんのき）』に詳しく書かれています。

遺骸は弟子たちの手で箱根山を越え、裾野市桃園の定輪寺に葬られました。早雲寺には供養塔が建てられ、江戸時代から多くの俳人が参詣に訪れています。



宗祇の句碑

## 皇女和宮の霊慰める塔之澤隧道

明治維新をめぐる悲劇の皇女和宮は、明治10年9月2日、静養先の塔之澤温泉の元湯（今の環翠楼）で亡くなりました。御年32歳でした。

静養先の旅館は早川の川べりにあり、急流のため、宮は川音を気にされました。旅館の主人で、村の戸長（村長）だった中田暢平（ちようへい）はすぐに村人を集めて川の石をどけ、「しがらみ」を掛けました。川の中に杭を打ち並べ、これに竹木を渡して水流をせき止め、水がゆったりと流れるようにしたのです。

宮は喜ばれ、歌会まで開かれています。しかし容態は急変し、わずか一か月足らずの御静養で急逝されてしまいました。中田は「川音は温泉客の誰もが気にするはず、宮の御心を生かそう」と、しがらみに代え、水勢を弱めるトンネルを掘りました。

かずさ屋旅館の裏をくっさくした100メートル足らずのトンネルで、川床より高く、大水のときだけ流れるように工夫されています。



塔之澤隧道の記

## 弾誓上人がこもった阿弥陀寺の洞くつ

箱根登山鉄道の塔の沢駅から、塔ノ峰を目指すと、20分ほどで阿弥陀寺に着きます。さらに山に入り、絶壁のような崖をよじ登ると、かなり大きな洞くつがあります。

この洞くつは、戦国時代の末期、戦乱に悩む民衆を救った木食遊行僧弾誓上人（たんぜいしょうにん）が籠った霊場で、同寺の奥ノ院となっています。

洞くつは中で二手に分かれ、一巡りできるようになっています。「胎内くぐり」つまり、母親の胎内に似た洞くつをくぐり抜け、清浄な身心に生れ変わる修験道の行場でした。

弾誓は慶長9年（1604）この洞くつに入り、仏舎利（お釈迦さまの骨）塔を見つけたとされています。弾誓を阿弥陀仏の化身と崇める民衆は「現世の安穩」と「来世の極楽往生」を願い、重い石塔・石碑63基を次ぎ次ぎに洞くつに担ぎ込みました。

弾誓はそれぞれに「南無阿弥陀仏」の名号を刻みました。洞くつの中には今も民衆の信仰をしのばせる塔や碑が並んでいます。



奥ノ院洞くつに並ぶ板碑

## 橋は一つでも三枚橋

箱根八里といわれた江戸時代の東海道は、湯本で「三枚橋」を渡りました。橋を渡らず温泉場へ向かう道は「湯場道（ゆばみち）」といいました。

三枚橋は、江戸時代後期の資料では土橋で、長さ22間（約40メートル）幅1丈（約3メートル）余とありますから、かなり大きな土橋が架かっていたことが分かります。この頃も橋は1つです。では、なぜ「三枚橋」というのでしょうか。

小田原北条氏時代、早川の川幅は今よりずっと広く、中州が2つあって、三枚の橋が架かっていました。山に向かって地獄橋・極楽橋・三昧（さんまい）橋と呼ばれました。

当時は、橋を渡り切ると早雲寺の総門でした。北条氏の菩提寺としての権威は強く、寺に逃げ込めばどんな犯罪人も罪を免れました。

極楽橋まで逃げると、追手は追わず助かったので、次の橋を「これからは仏三昧（ほとけさんまい）に生きよ」という意味で「三昧橋」と名付け、その名が今は「三枚橋」として残ったのです。



三枚橋古写真



## 復元された一里塚

江戸時代、幕府が日本橋を起点に一里（約4キロメートル）ごとに、街道の両側に築かせた一里塚は、歩いた距離が分かるので、旅人から大変喜ばれました。しかし、今日ではほとんど残っていません。

箱根の畑宿（はたじゅく）に残る一里塚は、江戸から二十三里（約92キロメートル）を示す塚ですが、この間に、道の両側に残っている一里塚は、保土ヶ谷の品濃坂だけです。

畑宿の一里塚も、片側がかなり崩れていましたので、平成10年、箱根町が発掘調査し、昔のままに復元しました。

大きさは幕府の命令どおり、直径5間（約9メートル）の円形で、裾廻りを石垣で固め、中に小石を積み上げ、表層に土を盛り、頂上に目印の木を植えたことが分かりました。

塚の高さなどは、『新編相模国風土記稿』などを参考にして、高さは4.5メートル、目印の木は畑宿から見て、右側の塚にモミ、左側の塚にはケヤキを植えました。



## 僧侶が守った箱根の杉並木

旧東海道で杉並木は、箱根の芦ノ湖畔にし  
かありません。芦ノ湖畔は霧の深い日が多く、  
松が育ち難いため、霧が好きな杉に植え替え  
たのだろう、と考えられています。

樹齢は約350年、高さ30メートルの大木に育  
ち、今も413本残っています。まさに「昼なお  
暗き杉の並木」です。

この美しい杉の並木は、戦時中、危うく伐  
られるところでした。昭和19年秋、当時の県  
知事から「軍用の木造船を造るため、杉並木  
の中から良質の木を選び、30～50本緊急に供  
出されたい」という要請書が、当時の箱根町  
他二ヶ村組合役場に届きました。

担当は勤業課の職員で、近くの興禅院の住  
職田中隆之でした。田中は県庁に呼び出され  
て督促されましたが、県職員が昼食に出た、  
わずかなスキに関係書類を持ち逃げし、書類  
を焼き捨てたあと、従軍僧を志願して中国に  
渡りました。この捨て身の行動で、1本の杉  
も伐られることなく残ったのです。



## 唐犬に助けられた箱根宿

箱根宿は、江戸を出て東海道10番目の宿場です。「箱根八里の間に宿場がないと困る」という、西国大名の要請で、東海道五十三次では3番目に遅く、元和4年（1618）に開設されました。

幕府は、小田原宿と三島宿からそれぞれ50軒ずつ民家を移し、「お米は3,000俵、お金は必要なだけ出す」という約束で開きました。旧箱根宿に、今も小田原町・三島町の字名が残るのはこのためです。

しかし、この頃芦ノ湖畔の原野には狼がたくさんいて、宿場が開けません。人々はお上に願って、唐犬2匹をもらい、この唐犬が狼を喰い殺してくれました。お陰で宿場を開くことができましたが、唐犬も傷付き死んでしまいました。村人は唐犬を手厚く葬り、犬塚明神として祀りました。

箱根宿の鎮守・駒形神社の境内に祀られている小さな祠がそれです。祠の前に、唐犬をしのばせる犬の石像が置かれています。



明治中期の箱根宿

## 箱根宿で倒れた将軍献上の象

徳川 8 代将軍吉宗は、珍しい鳥獣が好きでした。このことを知って中国の商人鄭大成はベトナム生れの象を献上しました。

享保13年（1728）オス・メス2頭の象が長崎に着きました。メスは間もなく死んでしまい、7歳のオスだけが、翌年長崎から陸路江戸へ運ばれました。象は背の高さが2メートル、頭から尾まで3メートルほどでした。

京都では御所に入り、天皇・法皇も御覧になって、大変喜ばれました。

ところが長旅の疲れか、箱根宿に着いて象小屋に入るや倒れてしまいました。附添ってきた長崎代官所の役人たちは慌てふためき、江戸城へ「象不快（病気）」と早飛脚で知らせる一方、箱根権現・駒形権現で護摩を焚いて病気平癒を祈りました。

さらに象の好きな竹の子なども各地から取り寄せ、懸命に手当をしました。幸い、象は3日間で元気になり、無事江戸城へ着き、将軍はじめ、庶民まで大喜びしました。



浮世絵に  
描かれた象

## 外国人が建てた自然保護の碑

芦ノ湖畔の杉並木の下に、一基の石碑が建っています。碑の近くに別荘を持っていたイギリス人の貿易商モンタギュー・バーニーが大正11年（1922）に建てた碑です。

碑文は凡そ300年前に、箱根山を二度越えたドイツ人の博物学者エンゲルベルト・ケンペルの著『日本誌』の英訳本の序文を引用し、「人民は謙譲・勤勉・敦厚（とんこう=人情に厚い）にして、その地は最も天恵に富めり」と、日本を讃えたあと、「この光栄ある祖国をば、さらに美しく尊くして郷（けい）らの子孫に伝えられよ」と刻まれています。

碑文の前文は、昭和50年来日されたイギリスのエリザベス女王が、宮中での晩餐会の挨拶に引用されたことから、箱根町は大切にしています。

また、箱根を守る会は昭和61年、この碑の隣りに「ケンペルとバーニーを讃える碑」を建て、毎年勤労感謝の日に2人を讃える祭を開き、自然を守ることを誓い合っています。

移転前のバーニーの碑



## 箱根離宮と宮ノ下御用邸

箱根には戦前は、皇室の離宮と御用邸がありました。離宮は主に外国の賓客をもてなす所、御用邸は内輪の別荘とされています。

箱根離宮は明治19年（1886）、芦ノ湖畔の塔ヶ島（今は堂ヶ島）に建設され、2階建の白亜の洋風宮殿が、一際目を引きました。関東大震災で崩壊したため、日本建築の宮殿のみ修復して再開しましたが、昭和5年の北伊豆地震で再び崩壊しました。

以後、使われることなく、昭和21年神奈川県に払下げられ、恩賜箱根公園として開放されました。洋風宮殿を模した展望館が再建され、周廻コースも整備されています。

この丘の上から見る芦ノ湖と富士山の景は、天下の絶景といえましょう。

宮ノ下御用邸は、明治28年日本の純粋な宮廷建築で建てられました。昭和9年、高松宮殿下の別邸となり、昭和21年、富士屋ホテルが払下げを受けました。「菊華荘」と名付けられ別館として使われています。



箱根離宮（関東大震災前）

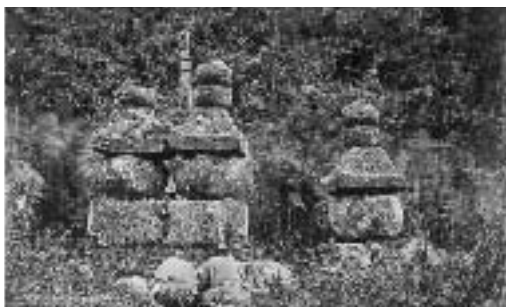
## 鎌倉時代を代表する石仏群

標高874メートルの国道1号線の最高地点を過ぎ、精進池に向かうと、池のほとりに鎌倉時代を代表する石仏群が見えてきます。

通称「六道地蔵」と呼ばれる像高3.5メートルもある地蔵菩薩坐像など、崖や岩に刻んだ磨崖仏と、通称「曾我兄弟の墓」と呼ばれる大きな五輪塔や、宝篋印塔が凡そ300メートルの間に点在しています。

ほとんどが、鎌倉時代後期の永仁元年（1293）から正安2年までの7年間に作られたものです。国の史跡と重要文化財の二重指定を受けていることで、素晴らしい石仏群であることが、分かってもらえるでしょう。

なぜ造ったのか。当時の箱根山は地獄の山と恐れられていました。旅人の多くは地獄の箱根山を嫌い、足柄路を迂回しました。鎌倉と京都の間が短い箱根越えの道は、鎌倉幕府にとって大切な道でした。安心して箱根を越えられるよう、幕府の重臣たちが金を出し、多くの石仏を造ったのでしょう。



石仏群の一つ、通称曾我兄弟の墓

## 国の登録文化財となった出山の鉄橋

箱根の美しい景観の中で、「出山の鉄橋」を渡る登山電車もまた一幅の絵です。

強羅行きの登山電車が塔の沢駅を出ると、間もなく早川の深い渓谷にさしかかります。この渓谷に架かった全長60メートル、水面からの高さ43メートルの「早川橋梁」を人々は「出山の鉄橋」と親しんでいます。

この鉄道の工事が始った大正4年(1915)は、既に第一次世界大戦に突入し、資材が手に入り難くなりました。そこで鉄道院が払下げた明治21年(1888)天龍川に架けた日本最古の鉄橋を使ったのです。

この鉄橋は、当時の鉄道局の技師長パウネルが設計したもので、弦材に鋼鉄、腹材は電車のバウンドを吸収し易い錬鉄を使っています。錬鋼混合の鉄橋としては世界的にも古く、平成11年、国の登録有形文化財となり、その貴重さが認められました。実は架橋のとき、県知事から「古材は箱根の美を損う」とクレームが付いたのに、残った幸運の鉄橋です。





## マトリョーシカのルーツは箱根細工

ロシアを代表する民芸品といえば、可愛い娘さんが次ぎ次ぎに出てくる組子人形マトリョーシカです。そのルーツはなんと、箱根細工の七福神でした。

江戸時代の後期、湯本茶屋の挽物業信濃家に養子に入った亀吉は、「十二玉子」と呼ぶ組子細工を考案しました。鶏卵の形に挽いた玩具で、2つに割れます。外側の卵から順次に割ると、一回りずつ小さな卵が出てくる仕組みになっています。

明治時代になると、同じ仕組みの「七福神」や「色違いだるま」が生まれました。明治23年（1890）この七福神を手に入れたロシアの鉄道王マントフの夫人は、自分の工房で七福神を真似て組子人形を作らせました。

その人形のモデルはロシアの民族衣裳をまとった農村の娘マトリョーナでした。その娘さんの愛称マトリョーシカがそのまま民芸品の名となったのです。パリの万国博で受賞して、ロシアを代表する民芸品となりました。



マトリョーシカのルーツとなった七福神

## 無医村を救った湯立獅子舞

箱根の仙石原と宮城野には獅子が湯立（ゆだて）をする珍しい湯立獅子舞が伝わっています。

湯立神楽は神職や信者が舞うもので、獅子が舞うのは仙石原と宮城野、御殿場市沼田の3か所だけという珍しい民俗芸能で、昭和49年国の選択無形文化財となりました。

この湯立獅子舞は、江戸時代中期の安永5年（1776）、甲州下吉田村（現富士吉田市）の神楽師菅沼儀兵衛が伝えました。

湯を沸かした大釜の前で、獅子が次ぎ次ぎに神楽を舞い、最後に煮えたぎる湯を笹でかき廻し、その湯花を神に奉納して、五穀豊じょう、疫病退散を祈願します。この湯花をかけてもらおうと、その1年無病息災だといわれ、多くの信者が集まります。

宮城野では昔は村に疫病がはやると、杉の葉のコシを作って病人の家々を廻りました。病人の枕元で獅子舞を舞い、悪病神をコシに封じ込め、コシは村外れに放逐しました。医者はいない村の必死の舞いだったのです。



## 防空頭巾をかぶった青い目の人形

箱根の温泉小学校には、防空頭巾をかぶった大変珍しい「青い目の人形」マリーちゃんが、大切に保存されています。

「青い目の人形」は昭和2年、日米親善のために、アメリカの民間団体から12,000体余りが、日本の小学校に贈られてきました。

既にその6年前に、野口雨情が作詞した童謡「青い目の人形」が歌われていたときだったので、贈られた人形は小学生たちに、大変可愛いがられました。しかし昭和16年、戦争に突入したため、敵国の人形として焼かれたり、海に捨てられたりし、全国で281体しか残っていません。

その中で、温泉小学校には防空頭巾をかぶって残っていました。当時の女の先生が機転をきかし、一目で「青い目の人形」と分かる金髪を、防空頭巾で蔽い、人目から隠しとおしたのだと思います。素晴らしい愛情ですネ。

箱根にはもう1体、宮城野小学校にもエミリーという名の人形が残っています。



## 観光博覧会から生れた大名行列

箱根といえば大名行列が思い出されるほど有名ですが、始ったのは昭和10年です。

この年、箱根振興会（観光協会の前身）が湯本駅前を会場に「箱根観光博覧会」を開催し、その人寄せに企画したのです。

演出は後に劇作家として名を成した北條秀司、当時、箱根登山鉄道の経理課長をしながら劇作の勉強をしていました。氏は、松竹の顧問で舞台装置や衣装考証を担当していた、日本画の久保田米斎画伯と相談して、行列の道具や衣装を整えました。

問題は大名行列の奴ぶりでした。幸い、松田町の寒田神社の祭礼の行列が、小田原藩の大名行列の奴ぶりを忠実に伝えていることが分かりました。早速、指導者の高橋正太郎さんを招いて、塔之沢の環翠楼の舞台上、連日12人の青年たちが特訓を受けました。

こうして昭和10年4月14日、小田原駅前から博覧会場まで、「下に下に」と練り歩きヤンヤの喝采をあげたのが始まりでした。



## 夏の夜空を焦がす大文字焼

箱根の強羅は、石がゴロゴロしている所、という意味で、その名が付いたといわれるくらい、淋しい高原でした。

それが大正8年（1919）、世界屈指の山岳鉄道が開通し、さらに2年後には早雲山までケーブルカーが開通すると、一転して高級避暑地となりました。

鉄道会社では大正10年頃、避暑客の旅情を慰めようと、地元宮城野村の青年会と図り、向山の明星ヶ岳にタイマツを燃やすことを決めました。そのとき、将来の「大箱根」を夢見て、「大」の字を燃そう、と決めたのです。

「大」の字の一画は108m、二画は162m、三画は81m、字の太さは巾7.2mという、とてつもなく大きいもので、字の輪郭に沿って、25cmほどに束ねたハコネダケ約350束を1.5m間隔に立て、70人ほどの青年たちが分担して点火するのです。

見事な「大」の火文字は、箱根の夏の夜空を焦がして、赤々と燃え続けます。



## 龍神の霊慰める湖水祭

箱根神社の宵祭りである芦ノ湖の湖水祭は長い伝統を受け継ぐ神秘的な祭りです。

奈良時代の頃、芦ノ湖には九ツの頭を持った龍が棲んでいた、と伝えられています。箱根権現を創建した山岳修業僧万巻上人は、村人の苦しみを聞き、湖の中に石台を築いて祈りました。すると龍は宝珠・錫杖・水瓶を捧げて降伏しました。

上人は龍が再び暴れないよう、鉄の鎖で湖底の木に縛りつけました。村人は湖畔に祠を建て、「九頭龍明神」として祀りました。

湖水祭はこの龍神の霊を慰める箱根神社の宵祭りです。毎年7月31日、宮司は三升三合三勺の赤飯が入った真新しいおヒツを持って御供船に乗り込みます。しょうの笛などを奏でる楽船、信者を乗せた御伴船を従え、夕やみ迫る湖心にこぎ出します。

おヒツを湖に沈め、神秘的な祭りが終わると、湖上の遊覧船はイルミネーションに輝き、豆灯籠と打上げ花火で火と光の湖に変わります。



## 西欧に初めて紹介されたハコネグサ

箱根山は1,800種に上る植物が自生し、植物の宝庫といわれています。その中で西欧に初めて紹介された植物は、意外にも地味なシダの仲間のハコネグサでした。

紹介したのは、ドイツ人の博物学者エンゲルベルト・ケンペルです。元禄4年(1691)と翌5年の2回、箱根山を越えて江戸へ参府旅行した彼は、帰国後、『廻国奇観』と『日本誌』を著しました。

その中で、「この草は薬効があるので、箱根を越えて旅をする人で、この草を採らずに通り過ぎるものはない」と紹介しています。

ケンペルが持ち帰った植物標本は、今はロンドンの大英自然史博物館に保存されています。平成8年、ここを訪れた箱根を守る会の理事で植物学者の本多まさ子さんは、1頁に13株のハコネグサを貼った標本を初めて見つけました。

この草は、江戸時代解毒剤に使われたようで、オランダ草とも呼ばれました。



大英自然博物館に保存されている標本

## 箱根の植物の代表ヤマボウシ

山が白い帽子をかぶったように見える、というので、その名がついたヤマボウシは、箱根を代表する美しい花木です。初夏に白色又は淡紅色のかなり大きな4枚の花弁（総苞片）をつけるので、すぐ見つけられます。

ミズキの仲間で、日本では北海道を除く各地の山野で、普通に見られます。その中で、箱根は変異を含めて特に多く、中腹の大平台から最高峰の神山の山頂まで見られるので、「ヤマボウシの天国」といわれています。

幕末の著名な蘭学者で、津山藩々医の宇田川榕庵（ようあん）が箱根で採集し、その標本をシーボルトに贈って、学名が付いたことはよく知られています。箱根に縁の深い植物です。この標本は、今もオランダのライデン大学付属国立腊葉（さくよう）館に大切に保存されています。

遺伝学者として、世界的にその名を知られた故木原均博士もヤマボウシを愛し、箱根の駒ヶ岳山麓でこの林を伐りゴルフ場を造ろうとした計画を止めさせました。

ライデン大学  
付属オランダ  
国立腊葉館に  
保存されている  
標本





## 関東大震災を復興させたハコネダケ

芦ノ湖畔を中心に、箱根山に多く自生している細い竹を、箱根の人は「しのだけ」といい、他所の人は「ハコネダケ」と呼びます。

この竹は、小筆の軸か民芸品に少し使われるだけで、用途が少く嫌われものです。しかし、この竹があったからこそ、関東大地震の大災害のあと、東京・横浜の大都市がいち早く復興したのです。

「エッ！竹で復興したの」と思われるでしょうが、昔の日本家屋は土壁を多く使いました。土壁は「こまいがき」と呼ばれる下地を作って、壁土を塗って仕上げます。この「こまいがき」の材料に、真竹よりずっと安く手に入る「ハコネダケ」が珍重され、どっと注文が殺到したのです。

旧元箱根村や旧箱根町から、馬の背中や馬力で三島駅（現御殿場線下土狩駅）に運ばれ、当時、御殿場廻りだった東海道線の貨車で、東京・横浜方面に送られました。お陰で湖畔の人たちは大変裕福になったそうです。

群生するハコネダケ



## 山岳信仰を伝える駒ヶ岳の御神火祭

箱根山は古代山岳信仰の霊場だった、といっても、皆さんは信じないでしょう。しかし、毎年10月24日朝早く駒ヶ岳山頂で行われる「御神火祭」は、すぐ目の前にそびえる箱根山の最高峰神山を神体山として仰いだ、古代の山岳信仰を今に伝えています。

この日、夜が白々と明け初めると、箱根神社の宮司以下神職たちは、駒ヶ岳の山頂に登ります。岩垣で囲まれた祭場で、古代そのままに「火切り」と呼ばれる木製具で、神に供える斎火（いむび）を切り出します。

この火で篝火を焚き、宮司は松明に点火して神山に捧げ、祝詞を奏上する。神職たちはその周りをぐるぐる廻りながら、大袂の詞を朗々と奉唱し、巫女が神楽を舞う。

この頃、神山は早くも錦に染まり、斜め左に霊峰富士がそびえる。時折芦ノ湖から上ってくる霧が、大自然の限り無い美を演出する。

古代・中世の人たちは、そこに神の姿を見たのでしょうか。

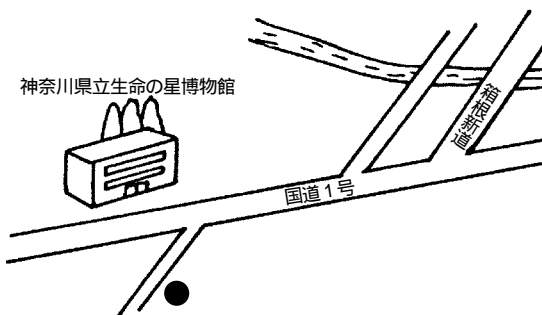


## 駒ノ爪橋跡

天保年間に書かれた『新編相模国風土記稿』の入生田村（小田原市）の項には、「駒留橋 東海道中湯本村界の清水に架す。石橋なり。長3尺（90センチ）幅2間（3.6m）、両村の持。橋上に頼朝郷馬蹄の跡と云あり。旅人此橋に足痛の立願す。」と載っています。これには、往時源頼朝が富士の巻き狩りから帰る際、この橋まで来ると馬が暴れてしまい、その際に橋の上に馬のひずめの跡が残ってしまったという逸話が残っています。そこで、旅人は「石に足跡をつけた頼朝の馬の頑健な脚にあやかりたい」と、道中足が痛まないよう祈願したということです。

後に小田原市板橋の山県有朋公の別荘古希庵（こきあん）の庭園に使われていたようです。

「箱根の史跡」より抜粋



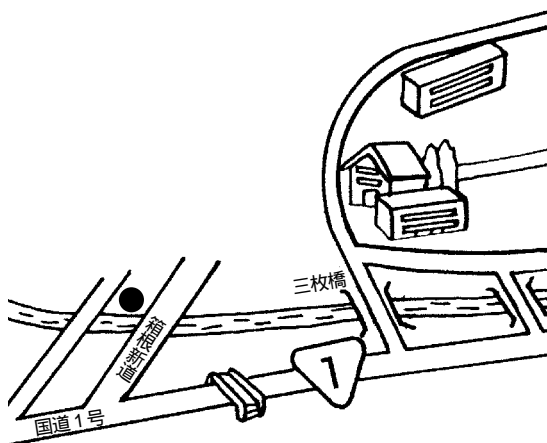
## 小田原馬車鉄道・電気鉄道前田橋跡

明治21年（1881）10月、国府津～湯本間に開通した小田原馬車鉄道の前田橋跡です。

馬車鉄道は、湯本山崎の台地に越え難いため、小田原の風祭から早川左岸の堤防沿いに走り、湯本山崎で前田橋を渡って、早川の右岸に出、上流の落合橋で再び早川を渡りました。

この橋は、明治33年（1900）馬車鉄道から電気鉄道に代わっても使われましたが、明治43年（1910）8月の大洪水で、落合橋と共に流失し、大正2年（1913）に鉄道は現在とほぼ同じ山側を走るようになりました。

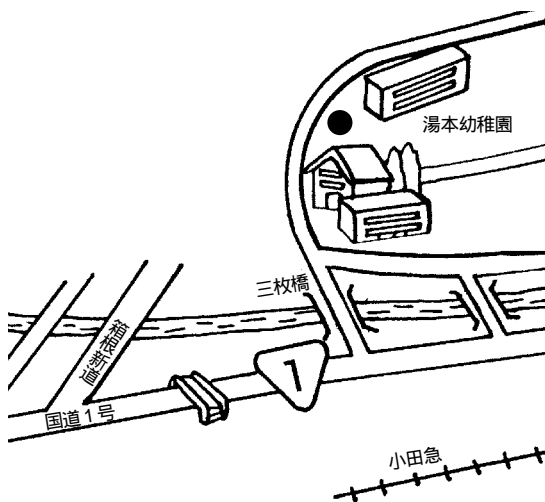
「箱根の史跡」より抜粋



## 辻村伊助邸跡

大正2年(1913)、園芸の研究と、ヨーロッパアルプスの登山のため渡欧した、小田原出身の辻村伊助は、翌大正3年(1914)には、日本人として初めて、ヨーロッパアルプスの冬山を踏破しました。ところが、同年8月、雪崩れに遭い、インターラーケンの病院に入院しました。入院中、親切な看護婦ローザ・カレンの献身的看護に、恋が芽生え、10月にロンドン領事館でローザとの結婚手続きをとり、帰国しました。帰国後は、兄常助と農園を営しながら高山植物の研究と執筆活動に入り、大正10年(1921)に、この反対側で「辻村高山園」を開きましたが、関東大震災のため、一家全員土砂崩れにより埋没してしまいました。

「箱根の史跡」より抜粋



## 小田原馬車鉄道・電気鉄道落合橋跡

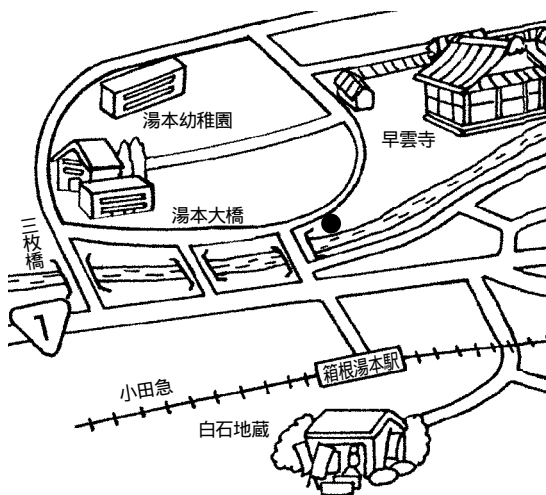
明治21年（1888）10月、国府津～湯本間に開通した小田原馬車鉄道の落合橋跡です。

馬車鉄道は、湯本山崎の台地が越え難いため、小田原の風祭から早川左岸の堤防沿いに走り、湯本山崎で前田橋を渡って、早川の右岸に出、落合橋で再び早川を渡りました。

当時の終点湯本駅は、この先、約200mの早川の川べりにありました。

この橋は、明治33年（1900）、馬車鉄道から電気鉄道に代わっても使われましたが、明治43年8月の大洪水で、下流の前田橋も共に流失し、以後、鉄道は現在とほぼ同じ山側を走るようになりました。

「箱根の史跡」より抜粋

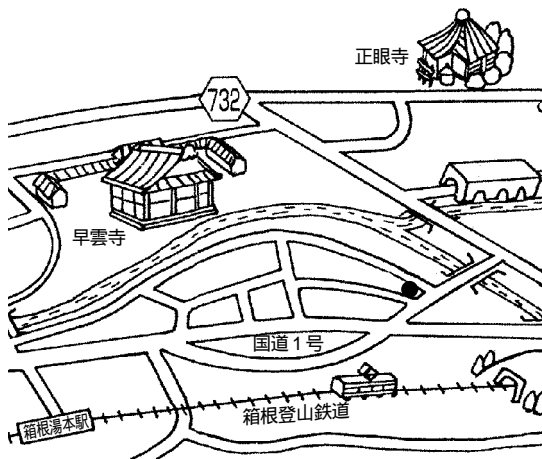


## 小田原馬車鉄道・電気鉄道湯本駅跡

明治21年（1888）10月、国府津～湯本間に日本で3番目の小田原馬車鉄道が開通しました。今日の箱根登山鉄道の前身です。全長12.9m、軌間は1,372m（狭軌）で、ここが当時の終点湯本駅跡です。全線を1時間20分ほどで走りました。すでにその前年、新橋～国府津間に鉄道が開通していましたので、湯本・塔之澤は東京から日帰りで遊べるようになりました。

この鉄道は、明治33年（1900）、東京の市電より3年も早く、日本で4番目の電気鉄道になりました。強羅まで延長され、世界屈指の山岳鉄道が開通したのは大正8年（1919）6月、その時、湯本駅は、現在の所に移りました。

「箱根の史跡」より抜粋



## 早雲寺（そううんじ）

金湯山早雲寺は、関東の覇者北条早雲の遺言により北条家2代氏綱が建立した北条氏の菩提寺です。京都・臨濟宗大徳寺の高僧以天宗清(いてんそうせい)が氏綱に招かれて下向、ここ湯本に開山しました。

早雲寺の落成は大永元年（1521）です。以後北条氏の興隆と共に栄え、全盛時には現在の三枚橋付近に総門を構えるほどの広大な寺域を持ち、その威容を誇りました。しかし、天正18年（1590）の豊臣秀吉の小田原攻めの際、兵火にあって焼け落ちました。

境内には早雲の末子、北条幻庵(げんあん)作と伝えられる枯山水(かれさんすい)、江戸期に建てられた小田原北条五代の墓などがあり、ここでご紹介する3基の文学碑と共に、訪れる人に長い歴史を語りかけてくるようです。

「箱根の文学碑」より抜粋





## 宗祇（そうぎ）句碑

飯尾宗祇（応永28・1421～文亀2.1502）は、近江、または紀伊の出身といわれる連歌師です。

若い頃に上京。仏門に入るため相国寺で修業しましたが、30才頃から和歌や連歌の創作に専念するようになり、40代半ばで連歌師としての地位を確立、その後足利將軍家の師範としての宗匠職にもつきました。一方で積極的に諸国を遍歴し、各地の武将や文人との交流を深めています。

関東管領の上杉氏を訪れた後、越後から美濃への旅の途中、文亀2年にここ湯本で病が悪化し、“ともしびの消ゆるやうに”その生涯を終えました。

この句は新選菟玖波(つくば)集に収録されたものです。碑の笠をかぶったような形は、「世に帰る」と「しぐれ(時雨)」の縁語から発想されたものでしょう。昭和8年に建立されました。

「箱根の文学碑」より抜粋

世に帰(ふる)

八更丹(きたに)しぐれの

やとり可奈

宗祇(花押)



## 大震災追悼句碑

大正12年（1923）9月1日に起きた関東大震災は、箱根地方にも大きな被害をもたらしました。湯本村（当時）の被害は大きく、死傷・行方不明は56名にも達しました。この中には我が国登山界の草分けで、「スウヰス日記」・「ハイランド」などの作品を著した紀行作家、辻村伊助の一家5人も含まれています。

この句碑は震災から3年後の大正15年、当時の湯本村々長梅村美誠（よしのぶ）がこれらの遭難者の慰霊のため、縁戚にあたる作家巖谷小波（いわやさざなみ）（明治3・1870～昭和8・1933）に追悼句を依頼して建立したものです。

「箱根の文学碑」より抜粋

追悼

大正十二年九月一日  
大震災遭難者の為に

山百合も

高焚（こうたき）貞（かお）の頸（うなじ）かな

大正十五年九月一日

小波



## 並木秋人(なみきあきひと)歌碑

並木秋人(明治26・1893～昭和31・1956)は福島県出身の歌人です。湯本に隠棲した昭和22年、早雲寺の境内でヒメハルゼミ(別名御経ゼミ)を発見しました。この蝉は一匹が鳴き出すと群全体が揃って鳴くことからこの名がつけられています。県内ではこの湯本近辺にしか生息せず、国内での分布では北限ということで、昭和40年に箱根町の天然記念物に指定されました。

昭和48年7月15日、故人の業績を称えるため、早雲寺境内にこの碑が建てられました。

「箱根の文学碑」より抜粋

あかときと啼(なく)ひくらしにさきかけて  
天に流らふ勤行蝉(こんぎょうぜみ)のこゑ

秋人



## 正眼寺（しょうげんじ）

鎌倉時代に地蔵信仰から生まれた寺です。戦国期には衰微していましたが、江戸時代の初め、尾形光琳（おがたこうりん）・乾山（けんざん）のパトロンとして知られる江戸深川の林木問屋、冬木屋上田氏の援助により再興されました。また東海道に面していたため、箱根路を往来する旅人が道中の安全祈願のために立ち寄ることで賑わうようになりました。

正眼寺の境内には芭蕉の句碑をはじめとして3基の句碑がありますが、この地、“曾我兄弟の化粧地蔵”と呼ばれている地蔵菩薩2体がまつられた曾我堂、狩野派の手によって描かれた襖絵などが所蔵されています。

「箱根の文学碑」より抜粋



宮ノ下アートルネッサンスの第一弾 2002年3月  
「そぞろ歩きミュージアム」完成

宮ノ下駅改札前に平賀太郎作「らんちゅうと箱根山椒魚」の彫刻と観光案内所となり夫婦桜の間に小川徹夜作「縁」ENISHIの彫刻がたてられました。予定では1年に1作品ずつ増やしていく計画です。

テーマは「宮ノ下のノスタルジー」で若手の作家にお願いして制作しております。宮ノ下の街中にアートが溢れるようになるのが楽しみです。春夏秋冬の風を愉しみながら現代アートとたわむれるそぞろ歩きも楽しい～



## 常泉寺と戊辰戦争の遊撃隊

慶応4年の戊辰戦争は、5月26日に箱根山崎で激しく衝突する。幕府側の遊撃隊は、その戦いに敗れ四散し一部は、堂ヶ島温泉の近江屋旅館に逃げ込む。逃げ込んだ遊撃隊は全部で10名、しかし5月29日には小田原藩軍に見つかってしまう。傷ついた遊撃隊には、もはや戦う力もなく、7人は戦死、2人は捕まり処刑される。それでも近江屋の主人、半兵衛の手配によって米びつに隠れた1名が生き残った。戦死・処刑された9名の遺体の頭部は湯本早雲寺へ、胴体は宮ノ下常泉寺にて埋葬された。その後近江屋半兵衛は、この遊撃隊をかくまい切れなかった思いと、遊撃隊の魂を慰めるために、常泉寺境内に供養塔を建立し、そして近江屋家先祖代々の位牌の中に、戦死した9名の戒名と俗名を、生き残ったとされている兵士の俗名を刻み供養した。



## 蛇骨川の温泉と蛍

蛇骨川は芦之湯と笛塚の境より湧水によって誕生する。宮ノ下で合流するまでに原流から数km、川幅は広くて7mの小さな川である。しかし、宮ノ下・木賀・小涌谷温泉の源泉はほとんどこの川の流域に存在する。この川の水がこの地域の温泉の源となっているのはいうまでもない。

先達々はこの川の恵みをよく知り、自然のままにして手を加えようとはしなかった。そして小涌谷踏み切り付近から宮ノ下国道1号線・蛇骨橋までの間は、自然の蛍が飛び立つ川としても地元人のよく知るところである。

この川を自然のままに残すことを教訓として知っている人は、その蛍を観光の目玉などにせず、優しく静かに見守っているのである。

蛇骨川の蛍のシーズンは五月下旬から六月下旬まで。自然に任せたままなので地元の人々でもいつが見ごろかは知らないのである。

しかし多いときは50～100匹ほどの青白いゲンジボタルの群れが、幽玄にさまよう姿を見ることができるともある。



小涌谷常泉寺墓苑の閻魔大王<sup>えんま</sup>

その昔、火山の噴煙をあげている場所を人々は地獄と言ひ、その地獄は箱根に2カ所あった。一つは、今でも活動している大涌谷の「大地獄」、もう一つを小涌谷の「小地獄」と言っていた。今では「小地獄」のはっきりとした場所の特定は出来ないが、その小地獄の入り口には、守り仏として閻魔大王を中心とした観音菩薩や地獄菩薩の石仏が置かれていた。

その閻魔大王は現在、小涌谷駅より歩いて3分程度の、常泉寺小涌谷墓苑の入り口に、多くの仏とともに移されている。左右の耳のほうまで口が開き、一見して怖い形相の閻魔大王とわかる。

しかし、この閻魔の表情をゆっくりと見てみると、怖いと言うよりも、どこかかわいらしく思えてくる。子どもっぽくもあり、表情の奥にやさしさを感じられる、不思議な閻魔大王である。





## 箱根駅伝35周年記念 小山国夫鎮魂の碑

国道一号線の宮ノ下交差点から元箱根方面に約300m上ったところ右側、木立の中にひっそりと立つ一つの碑がある。

この碑は昭和31年12月11日、駅伝練習中に当所で交通事故により亡くなった専修大学生・小山国夫選手を悔み、宮ノ下観光協会により昭和34年3月5日、関東大学駅伝競争35周年記念碑として銅版彫にて建立された。裏面には小山国夫君のお母さんの鎮魂の句が刻まれている。

若ざくら  
箱根の山にうえられて  
めぐみのつぼみ  
ひらくうれしさ  
小山国夫母

今でも毎年暮れに箱根駅伝の練習が始まると、この前を通る選手達を暖かく小山選手が見守ってくれている。

小山選手が見守ってくれているおかげだろうが駅伝本番でも事故も起こらず、選手達も安心して箱根の山を駆け登っているようだ。



## ハコネサンショウウオ

ハコネサンショウウオは、本州や四国の深山の渓谷に生息する原始的な両生類。箱根のサンショウウオは江戸時代、箱根名産の民間薬「小児のかんの妙薬」、「強壯剤」等として箱根宿や畑宿で、串に刺し乾燥したものが売られていた。1776年、オランダ通商使節の一員として箱根を越えたツンベルグは、水中に住むめずらしいトカゲと思い、持ち帰りヨーロッパの学会に紹介。ホッタインの研究により両生類として学会に発表された。学名の原標本産地として学術的に貴重な生物である。

山藤の色づくころ清水の涌く岩間で産卵、幼生は2年余の水中生活で“えら”呼吸する。成魚になると“えら”が無くなり陸上生活するが、肺がなく皮膚呼吸をするため水辺や落葉の下に隠れている。

箱根町は天然記念物に指定し保護することにしたが、箱根新道や椿ライン、ターンパイク等がハコネサンショウウオの生活環境を分断し、道路からオイルやタイヤくず、凍結防止剤や融雪剤、また上流のワサビ田の殺虫剤等が溪流の水質を悪くし、須雲川上流域のハコネサンショウウオは絶滅寸前である。



## 箱根の七福神

室町時代末のころから始まり、とりわけ農民や漁民に厚く信仰され、現在をなお続けている七福神。そのルーツは中国やインドの思想にあるといわれています。

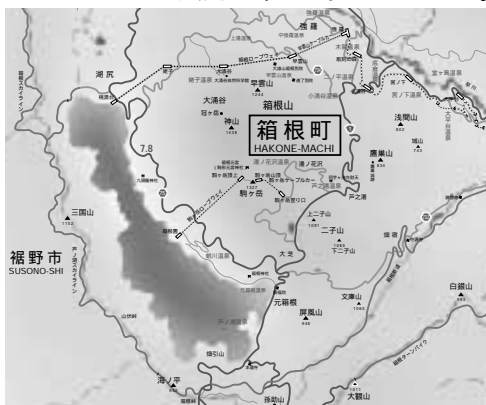
七人の福德の神々、「大黒天(だいくてん)」、「恵比寿神(えびすじん)」、「毘沙門天(びしゃもんてん)」、「弁財天(べんざいてん)」、「福祿寿(ふくろくじゅ)」、「寿老人(じゅろうじん)」、「布袋和尚(ぼていおしょう)」の名前は誰でも一度は聞いたことがあるでしょう。

この「七福神」をお正月に枕下に入れて眠ると、夢枕に宝船に乗った七福神が現れ、福が授かると言い伝えられています。

さて、箱根で七福神めぐりをするなら、次のコースをお勧めします。畑宿の守源寺(大黒天) 箱根神社(恵比寿神) 元箱根の興福院(布袋尊) 芦ノ湖野草園内の本還寺(寿老人)

箱根芦川の駒形神社(毘沙門天) 芦ノ湯の阿字ヶ池弁財天(弁財天) 箱根小涌園内の山王神社(福祿寿)。

きっとすばらしい風光の中でお参りができます。



## 箱根用水1(伝説と史実)

芦ノ湖は海拔723m、貯水量1億七千万tで宮ヶ瀬ダムに匹敵します。

地元の言い伝えでは、江戸の町人・友野与右衛門、深良村名主・大庭源之丞、箱根権現別当快長僧正の3人は、水不足に悩む農民を救うため私財を投じ、幕府や小田原藩の権力に抵抗しながら用水を造り、その結果 開田500町歩(1町歩は約1ha)、8000石(一石は150Kg)の増収になったと言われてきました。

しかし、堀抜工事は箱根関所の抜け穴と疑われ、友野は処刑された。そしてこの話は、戦後、民主主義実践のモデルとして、小説や映画(箱根風雲録)で全国に紹介されました。

最近深良小学校の佐藤隆先生は、郷土史編集のため地元旧家保存の古文書を調査したところ、『箱根用水は、耕作期にだけ湖水を渡し、他は早川に流した。小田原藩が藩米増加のため計画し、友野らは工事請負人、農民は代官の命令で動員された。友野らは工事完成後、新田からの年貢米を売り上げて資金を回収し、さらに利益を見込んだが、堀抜工事1年の予定が4年に延び、新田500町歩が200町歩以下と資金繰りに困り、富沢村の「選び出し米代金」として幕府へ納めるお金110両を着服して訴えられた』ことが判明しました。友野は、義人ではなく横領犯という不幸な結末に終わったようです。

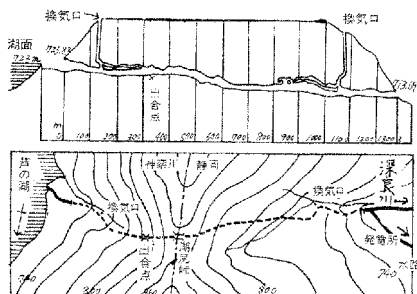
## 箱根用水2(水争い)

明治29年、水不足の早川筋水利組合は、湖尻の甲羅伏(石積と土俵の水門)を破壊し湖水を早川に流しました。静岡側はこれを不当として訴え、1、2審では“古来の流れの水底さらい”として無罪でしたが最終審で“甲羅伏破壊の刑事責任”を問われ有罪となり、以後神奈川県は取水には触れずに来ました。

明治末期、富田鉄之助のとりもちで“静岡側に水を1年中流し、神奈川側には水田面積比の十分の一を早川に流す”という事で和解早速静岡側は発電会社と水利使用契約を結びました。

大正12年、深良川に3カ所の発電所が完成、以後一年中水門から毎秒 $1.6\text{m}^3$ 以上の水が流れ出すようになった。

翌年、新管理権者になった神奈川県は「必要アルキは引用水量ヲ制限シ…」の項目を内務省の指導で削り、静岡側に水の使用を許可。この時から「器は神奈川、水は静岡」と言われるようになりました。



箱根用水(深良用水)のトンネル断面(上図)、平面図(下図)。全長約1300m、出入口の落差約10m。東西より固い岩盤を避けてジグザグに掘り進み、約1mの誤差で出会う。300余年前の高い技術は国際的にも評価されている

## 箱根用水3(水争いの和解)

終戦直後、アイオン台風等で早川筋は大水害に見舞われました。原因は甲羅伏の土俵が壊れて湖水が一挙に流出したので、GHQの許可を得て神奈川県は甲羅伏に代わる新しい水門を作りました。しかし、従来の経過から管理の鍵は静岡側が持ち、大雨のたびにお願いして開閉していました。

平成元年、両県は話し合いの末、用水取水口を東海地震に備え鉄製に、また水害防止のために神奈川県が独自に操作できる湖尻水門に改造しました。

最近、「芦ノ湖の水資源を考える会」では、裾野市まで小田原藩であった頃の初心にかえり芦ノ湖を中心に共存共栄を目ざして話し合いをしています



新深良水門  
東海地震に備えた鉄骨の近代的水門



新湖尻水門  
水害予防のため神奈川県が自由に開閉できるようになっています

## 軍人・閑院春仁

江戸期以降、幕府(政府)は自らの権威を示して政権を安定させるために、皇室を重要視していました。

小田原に在住しておられた皇族・閑院春仁(1902～1990年)は、学習院に通わず神奈川県立第二中学校(現在の小田原高校)に入学し中等教育を受けられ以後、陸軍戦車部隊長として太平洋戦争の戦場で活躍されていました。

戦後、米国の方針により多くの皇族が離脱され、宮様も春仁から純仁と改名して平民になり実業界入りしました。しかし、元皇族ということで政財界で踊らされ、苦勞したようです。

商魂よりもまず、「総家族主義」を唱え、家族よりもむしろ隣人を愛した宮様は、小田原に広大な土地(約2万坪)と箱根の強羅に別邸(現在の料亭旅館、強羅花壇)を持っていました。

かねてから宮様は小田原を“文化的な町”というイメージを持っておられ、私有地の大部分を手放し、そこは現在、旧県立城内高校、私立相洋高校、小田原女子短大、小田原競輪場、MRAアジアセンターになって、住民のために役立っています。



強羅花壇

## 里の道

箱根町 湯河原町 真鶴町 熱海市

日本初!海外ミュージシャン出演の  
野外コンサート「箱根アフロディーテ」

1971年(昭和46年)8月6、7日の両日、箱根の芦ノ湖畔・成蹊学園乗風台(今の箱根園と山のホテルの間)で、英国のロックバンド「ピンク・フロイド」を招いて日本初の野外コンサート「箱根アフロディーテ」が開かれました。主催はニッポン放送。観光当局の調べによると、来場者は約4万人。

当日、夏とは思えない寒さが一帯を包み込む中、朝早くから入場する若者の長蛇の列が森を囲み、奇妙なファッションのヒッピーと普通のロック・ファンが整然と列を作っていました。

出演したのは、当時のロック、フォーク、ジャズなどの音楽界をリードするミュージシャンたち。海外からは1910フルーツガム・カンパニー、パフィー、セント・マリー、国内からロック部門ではモップス、成毛滋とフライド・エッグ。フォーク部門ではおくや姫、赤い鳥、ダーク・ダックス。ジャズ部門では渡辺貞夫セクステッド、山下洋輔トリオなど。

トリを取ったのはもちろんピンク・フロイド。森に囲まれた背後には芦ノ湖、霧が流れる大自然の中、エレキ・ギターの音が「クウィーン」と鳴ると、霧がステージにスーと寄ってくる場面も見られ、雰囲気満点。この自然の舞台効果は後日、彼ら自身も大満足だったようです。





## 箱根仙石原の先駆者・須永伝蔵の耕牧舎

明治5年(1872年)足柄の県令・江川英武(太郎左衛門の息子)は、広大な仙石原高原に着目し、村民の共有地を300円で買い上げ県有地とし、甲州から人を入れて開墾に着手しましたが、成功しませんでした。

明治13年(1880年)実業家・渋沢栄一(1840~1931年)は、三井銀行頭取の益田孝等と共同して県有地737<sup>ヘクタール</sup>余の払い下げを受け耕牧舎を設立。15代將軍徳川慶喜に仕え、影義隊を結成した幕臣で渋沢氏の従弟の須永伝蔵を現地責任者として派遣し、開拓に当たらせました。

当初は牧羊場として毛布の原料となる羊毛を生産する予定でしたが、当地は酸性の火山灰土で気候は多湿多雨、冬季は厳しい寒気強風で牧草栽培には適しませんでしたので、乗馬用の生産・育成・牛乳の販売等に転じました。

この須永氏の情熱と努力が実を結び、翌年には富士屋ホテルのある宮の下に支店を開設。以後、沼津へと販路を拡げ、東京に進出。明治28年(1895年)には牛200頭、馬80頭、年間280石(5万<sup>リットル</sup>)の牛乳を販売したと記録されています。



軌道に乗った耕牧舎でしたが、明治37年(1904年)に須永氏が病で倒れ、後継がいなかったため耕牧舎は廃止となってしまいました。

その後、広大な牧場はもともと村民の共有地であったことから仙石原に350<sup>ヘクタール</sup>を寄付、残りは別荘地やゴルフ場になりました。また、宮内省の依頼を受け、大湧谷の温泉を利用してこの土地の再開発が行われました。(箱根温泉供給社史を参照)

## 九頭龍伝説と湖水祭の起源

霊山の駒ヶ岳に跪伏して修練苦行すること三年、遂に箱根代権現を奉じた萬巻上人は、また大きな試練を克服されました。そのころ、芦ノ湖に棲む九頭の毒龍が、しばしば雲を呼び波を起こして荒れ狂い、里人をくるしめていました。上人はこれを見て、里人たちを救済しようと決意され、湖水の壇に参籠祈誓して、法力をもって龍を調伏されました。懺悔した九頭龍は、やがて宝球錫杖と水瓶を捧持して帰依したので、上人は龍神と手厚くお祀りされました。今、毎年7月31日に斎行される湖水祭はその伝統祭祀であります。

小田原商工会議所箱根青年部発行「お宝ファイル」より引用



写真提供:箱根神社

## 萬翠樓 福住

創業寛永二年(1625年)

箱根のかごかき唄に「晩の泊まりは箱根か三島  
ただし湯本の福住か」とうたわれ、江戸時代から旅  
人や湯治客に親しまれている。

明治十二年(1879年)、十代目主人の福住正兄  
(まさえ)は西洋建築と数寄屋造りが融合する、意匠  
を凝らした建物を完成させる。その建物(現在の旧  
館は現存する希少な擬洋風建築として、国の登録  
有形文化財となり、神奈川県からは「かながわの建  
築物100選」に選ばれました。

また、多くの著名人にもこよなく愛され、昭憲皇太  
后、有栖川宮熾仁親王、木戸孝充、井上肇、伊藤  
博文、福沢諭吉、市村羽左衛門、尾上菊五郎、河  
竹黙阿弥といった多くの文人墨客が宿泊・滞在し  
た記録が残り、数々の書などが現存しております。ま  
た萬翠樓の名は明治九年(1876年)、木戸孝充公  
がご逗留の際に名付けられたものです。

小田原商工会議所箱根青年部発行「お宝ファイル」より引用



写真提供:福住旅館

## 白雲洞茶苑

白雲洞茶苑(はくうんどうちゃえん)は、大正時代に三井コンツェルンの設立者であり茶人としても名を馳せていた鈍翁・益田孝によってはじめられました。

その後、美術品収集家としても著名だった横浜の三溪・原富太郎に譲られ、昭和になって原家から電力界の重鎮である耳庵・松永安左衛門に贈られました。明治、大正、昭和を代表する3人の茶人によって伝えられてきた粋を凝らした茶室でしたが、松永氏が亡くなった後は荒れ果ててしまい、朽ち果てるばかりになっていました。

しかし、昭和57年(1982)に茶室建築の権威といわれる中村昌生博士などの協力もあり復元され、平成13年(2001)には国の登録有形文化財に登録されました。

巨岩の間に点在する四棟の茶室は、全体に森林のなかに侘び住む山びとの住まいを主題として構成され、平坦地が選ばれる多くの茶室のなかで特異なものといえます。この一群の茶室は、伝統的ないわゆる「草庵侘茶席」の構成を踏まえながら、近代茶人の自由な茶の精神を茶室建築に反映させ茶室の形式的な束縛から離れました。それは茶道の初源に立ち返ることであり、近代数奇の茶道の遺風を偲ぶ貴重な茶席群になっています。

〒250-0408  
神奈川県足柄下郡  
箱根町強羅1300  
(箱根強羅公園内)  
Tel 0460 - 2 - 2825  
Fax 0460 - 7 - 2597



## 正眼寺

正眼寺の創建は古く、鎌倉時代に地蔵信仰から生まれたお寺です。この寺には、現在、曾我堂、曾我兄弟所縁の2体の木造地蔵菩薩立像、供養塔、槍突石など、曾我兄弟に関係のあるものが多く残っています。曾我十郎・五郎の兄弟は、建久4年(1193)5月28日、源頼朝が富士の裾野で行った巻狩りの宿営地で、亡父河津三郎祐泰(すけやす)の敵、工藤祐経(すけつね)を討って宿年の思いを果たしました。

正眼寺は、慶応4年(1868)の箱根戊辰戦争で旧幕府方の遊撃隊の手によって創建時の地蔵堂、曾我堂共に焼失してしまいましたが、曾我兄弟の2体の像は無事持ち出され、大正年代に裏山に再建されたお堂に祀られています。

この2体の像は、兄弟が地蔵菩薩に化けたものだといわれ、「曾我兄弟化粧の像」と呼ばれ親しまれてきました。また、寺の言い伝えによると、虎御前が兄弟の霊をなくさめるために曾我堂を建て奉納したものだといわれています。

五郎の像の胎内から康元元年(1256)の銘のある印仏が発見され、制作は鎌倉中期であることがわかりました。曾我兄弟木造地蔵菩薩は、秋の彼岸中(20日~26日)に公開されています。



## 龍宮殿本館

ザ・プリンス箱根 龍宮殿本館の建物は、宇治の平等院鳳凰堂を模して造られたといわれています。確かに組物、垂木軒、火灯窓、屋根頂部の飾り、高欄などに古式豊かな建築構造を見てとることができます。この建物は、昭和13年(1938)に開業した弁天島の「浜名湖ホテル」を昭和31年(1956)に移築したものです。

インドのネール首相や西ドイツのアデナウアー首相などに、「日本風の美しいものを味わってもらおう」という外務省の案内でこのホテルに宿泊されたことがあります。龍宮殿本館の階段は、擬宝玉高欄です。擬宝玉は寺院や神社では一般的ですが、ホテルとしては珍しいものです。敷かれた赤い絨毯や周囲の白壁と相まって神聖な感じがする階段です。

〒250-0522 神奈川県足柄下郡箱根町元箱根139

Tel 0460 - 83 - 1121



## 公時神社

「足柄山の金太郎」という童話がありますが、足柄山という山は存在しません。その代わり、箱根には金時山という山があり、その周辺には童話の主人公である金太郎にまつわる伝説が多く残されています。

金時山はもともとイノシシの頭に似ていることから猪鼻岳と呼ばれていました。しかし、江戸時代、ある戯曲者によって金時山と名付けられたと伝えられています。戯曲者が「そういえば坂田公時が生まれたのは、この辺りでは？」と湯宿の主人に尋ねたところ、「あの山(猪鼻岳)の向こうです」との返事。「それは面倒だ。生まれたのは『あの山』ということにしよう」ということになったのだそうです。金時山は、南足柄市・小山町・箱根町という、かつて足柄と呼ばれた市町の境界線に位置していますので、この戯曲者の命名もまんざらいい加減ではなかったことになります。

金時山の麓には、金太郎が住んでいたといわれる「宿石(やどいし)」と、小さな社が上に置かれた「蹴落とし石」とがあります。この社は金時山の「奥の院」として祀られ、公時を村の守り神として古くから盛大に公時祭を開いていましたが、明治の中ごろに途絶えてしまいました。ところが昭和6年(1931)に、その「宿石」が突然大音響をたてて真二つに割れるという事件がおきました。「これは公時さんのお怒りでは」と驚いた村人たちは、昭和8年(1933)に「公時祭」を復活させました。昭和36年(1961)には、公時神社の神殿も建てられ、この年から、端午の節句であり「子供の日」の祝日でもある5月5日に「公時祭」を開くようになりました。

